# 歴史ウォーク（三木市の歴史に触れて感動の１日）

隊友会東播支部　石田支部長以下１９名は、史跡研修としては絶好の天候の中９月１３日（日）１０時から令和８年度の歴史ウォークとして三木市の散策を行いました。主な散策先としては三木城跡地及び周辺にある歴史的建造物等を重点に見学しました。特筆するところは、旧玉置家住宅、三木城跡地、三木の特産品である金物資料館、旧小河家別邸でそれぞれにボランティアの案内担当の方から丁寧な説明を行って頂き、解りやすく有意義な１日となりました。

石田支部長 挨拶



細貝事務局長 挨拶



皆さんは、今回訪れた場所についてはあまり面識がない方も多いと思いますので、今回に限り詳細に紹介してみたいと思います。

まず最初に訪れた旧玉置家住宅について紹介します。三木市は１７４７年（延享４年）～１８４２年（天保１３年）まで上州舘林藩(群馬県)の飛び地領でした。上州舘林藩の財政立て直しを図るため１８２３年（文政６年）に切手会所（現在の銀行）が開設され、１８２６年に切手会所として建てられた旧玉置家住宅に移転し、建物は国登録有形文化財です。玉置家を興した初代は近傍の雲龍寺の第２１世大器晩成大和尚であり、１８７５

年（明治８年）に還俗して玉置性を名乗られ明治初期に切手会所の土地建物を取得した。また、三代目玉置福蔵氏は、朋友の小河秀太郎氏、宮崎新蔵氏とともに、１９１２年に株式会社三木銀行（1944 年に兵庫無尽として設立され、1951 年には兵庫相互銀行に改称されました。1989 年には普通銀行に転換し、現在の名称である兵庫銀行となりました。1995 年経営破綻のため、みどり銀行となり 1999 年に阪神銀行に吸収合併され、みなと銀行となっています。）を設立しています。

建物は築後約２００年ですが、とても頑丈にできており、特に数寄屋建築や公家屋敷などでもよく見られる日本の伝統的な建築様式のひとつである「むくり屋根」も見ごたえがありました。また、勝海舟が書いたとされる「抱朴含真」（素朴さの中に誠があるという意味）の額が飾られていたり蔵の外壁を見ると通気窓の形が「ひょっとこ」や「おかめ」のように見える面白い造りでもありました。

**【旧玉置家住宅】見学風景**



次に訪れた三木城跡は別所長冶の居城として知られています。羽柴秀吉による兵糧攻め、いわゆる「三木合戦（三木の干殺し）」の舞台になったことでも有名な城です。小寺氏の御着城、三木氏の英賀城と並び播磨三大城と称されたほどの堅城でしたが、1 年 10 ヶ月におよぶ籠城戦の末に敗れました。現在は、本丸跡周辺が上の丸公園として残っており、公園内には長冶の騎馬像や城外への抜け穴があったと伝えられる「かんかん井戸」があります。なお、近年の調査で羽柴秀吉が築いた付城群や土塁が見つかっています。また、近隣には三木城攻防戦の最中に陣中で没した竹中半兵衛の墓があります。

**【三木城跡】見学風景**







次に三木市金物資料館を訪れました。三木市が全国屈指の金物の町として栄えるきっかけとなったのは、天正６年（1578 年)、羽柴秀吉の三木城攻めだといわれています。この戦いは、天正６年３月２９日に秀吉は三木城包囲を開始し、戦いが続く中で別所氏への毛利氏からの支援が不可能な状況になってしまい、天正８年（1580 年）１月、三木城内の食料は既に底をつき、別所氏は「自らの命と引き換えに兵は助けてくれ」と秀吉に願い出たといわれています。そして 17 日に長治一族が切腹し、１年１０ヶ月に及ぶ篭城戦が終了しました。

秀吉は焼け野原となった三木の町の復興を考え、免税政策をとって四方に散らばった人びとの呼び戻しを図りました。復興のために集まった大工職人、その道具を作る鍛冶職人が次第に増え、三木の町も活気づいていったといわれています。

**【三木市金物資料館】見学風景**





復興が一段落すると、大工の仕事がなくなり、大工職人たちはやむなく京都、大阪、丹波、但馬へ出稼ぎに行くようになりました。そのときに大工が持参した道具の素晴らしさが評判になり、次に行く時には品物をもって売りさばくようにもなりました。こうして鍛冶の里三木としての地盤を固めていき、全国を股にかける三木金物卸商のきっかけにもなりまし

た。そして現在に至るまで、伝統の技を基礎として多くの優れた金物が開発・生産され続けており、資料館でその品物を確認することができます。毎月第一日曜日に展示される古式鍛錬での鍛冶場もありました。

最後に訪れた小河家別邸を紹介します。明治から大正にかけて初代郡会議員、三木町長などを歴任し、また三木銀行の設立に貢献して、地域の政治家、実業家として活躍した小河秀太郎が明治の末期に別荘として造営したものです。

2,204.95 平方メートルの広大な敷地に、庭と建物が上手く調和し、庭は高い技術と意匠を備えた池泉回遊式庭園として、また建物は当時の技術や材料の粋を集めた近代和風建築として、何れも高く評価されています。建設年代は不詳ですが、所有者の聞き取りから考えて、明治時代後期と考えられています。

屋敷は、北面に表門を構え、西側に沿って番人小屋、物置、倉庫、女中部屋等の付属的な建物を構え、敷地の南半に、主屋や中庭をはさんで離れ座敷、蔵等を構えています。

主屋には、昭和４年（1929 年）に来訪された朝香宮鳩彦王（あさかのみややすひこおう）の宿泊所となり、上段の間や貴人用浴室、便所などを設けられ、その造作は明治時代の國包（現在、加古川市）建具工や大工の水準の高さを示しています。

また、全国から取り寄せた銘木を惜しげなく使用し、自由に表現した建物で、再建が困難な貴重なものとなっており、平成１８年に国登録有形文化財に登録されました。

庭園の完成年代は不明ですが、残された写真などから、明治時代末期には庭園を含む邸宅の全体が完成していたものと考えられます。庭園は、緩

やかな斜面を利用して主屋及び離れ座敷を中心に、前庭・主庭・中庭・裏庭・側庭の５つからなっています。

主庭は、池泉回遊式で池を中心に回ることができ、移り変わる景観を楽しむことができる構成となっています。

それぞれの庭が建造物と一体となって優れた伝統的庭園を構成しており、近代庭園の高い技術を兼ね備え、平成１９年に登録記念物として登録されました。

最後に、旧小河家入り口横にある「番人小屋」、現在は喫茶店「休憩しま所」において、今回の歴史ウォークで得た知識を語り合い、幸せな憩いのひと時を過ごす予定でしたが、先行の団体客で喫茶店が満席であったことから、幸いにも見学場所である旧小河邸内の座敷を使用させていただき別邸の雰囲気を満喫しながらケーキと飲み物を頂いて終了となりました。

**【 旧小河邸内の座敷】にて団欒風景と支部長閉会の辞**







# 歴史ウォーク参加者による集合写真



今回の歴史ウォークに参加して、それぞれの地域で様々な歴史があり、一度は訪れてみてはいかがでしょうか。我々は今回の見学を通じて、尊い歴史の上に胡坐をかき、のほほんと生きているのではないだろうかと反省する１日でもありました。

事務局長　細貝　寛徳